



外婦人労働資料第二九号

労働力の中の婦人

労働省婦人少年局



筆者

フリーゲ・S・ミラー女史は一九四四年八月以来合衆國労働省婦人局長。女史はニューヨーク
労働省の労働人労働及び最低賃金課の課長、ニューヨーク労働省委員、ロンドン駐在ジョン
・G・ウィナント大使の特別助手をも務めた。一九四六年一月—二月にかけ、女史はロンドン
で開かれたILO（国際労働機関）の規約問題会議における政府代表を務め、同時に開かれた同
際連合總會に対する合衆國政府代表の顧問として働いた。女史はまた多くの他のILOの会議に
列席した。

労働力の中の婦人

現代の産業的構造が婦人労働を必要とすることは、婦人が有給で雇われていた程度によつて示され
ています。それは一九四六年には千六百五十万という平時には前例のない数で、合衆國雇用者全体の
三〇％に達していました。この増加は、戦時中、婦人が雇われていた産業と職業、及び世帯の初めからこの方の変化を理解するには、経済の基
本的な発展について多少知っておく必要があります。

重要な発展として挙げなければならぬのは、生産が家庭から工場へ移ったことで、これは今なお
ひき続いて行われています。ニューヨークのケロウアースマイルに集中していた手袋の製造、シヨル
ジヤに集中していた燭台の製造が家庭から工場へ移されたのはつい近年のことでした。産業的・家内特
初の痕跡は、まだこの国に残っています。それをなくし、それを取替る点でアメリカは他国より遙か
に進んでいるわけではありません。現金収入のために行われる取替を家庭からひき放したのみならず、
工場生産へ移したことは、曾ては婦人が、家族のために多くの品物を生産し、ケロウアースマイルを
ろであつた家庭から、至清單位としての力を失わせました。仕事を追つて工場に入ろうとしたのが多
くの婦人たちの本来の衝動であつたのですが、至清的习惯は、それ以来こういう取替を婦人の仕事と
して、固定させてしまいました。

婦人の働くところ

工業化及び機械化につれて、空間の規模で行はれる大量生産と大量分配とが発達しました。工業連

第一表 10万人以上の女子労働者(14才以上)
が産われている職業 (1940年)

順位	職業	女子労働者	
		実数	総数に対する 女子の割合
1	家、事、使、用、人	1,420,469	91.3
2	速記者、タイピスト、秘書	988,081	93.5
3	教員(他の分類には入らない)	772,044	75.7
4	教師及これに類するもの(他の分類には入らない)	630,471	35.7
5	店員(他の分類には入らない)	515,539	40.8
6	簿記係、計算係、現金出納係	446,205	52.1
7	被服、アクセサリー工場の労働者	425,534	77.5
8	家政婦	362,431	99.2
9	給仕(家事使用人を除く)	356,036	67.6
10	看護婦(就学中のものを含む)	348,277	67.9
11	被服労働者(賃金を支払われない家族従業者)	233,279	19.2
12	理髪師、美容師、美容師部	206,592	49.7
13	商店の事務員	201,281	42.5
14	電話交換手	189,002	94.6
15	洗濯人(他人の家庭に雇はれている者)	186,183	98.2
16	使用人(家事使用人以外の)	174,724	55.3
17	洗濯人(他人の家庭に雇はれている者を除く)	167,967	77.7
18	飾、針、織、工、場、労働者	167,155	47.0
19	農業従事者(地主、小作人)	151,087	3.0
20	仕立屋(被服工場労働者を除く)	133,627	98.9
21	料理人(家事使用人を除く)	116,310	42.0
22	メッセ、荷物類、同僚労働者	115,106	66.9
23	寄居合、下宿管理人	100,355	90.5

○合衆国商務省同勢調査所調査、1940年度、
才16個合衆国勢調査、人口調査三巻
労働力、才一節合衆国抄集、才58表

があります。その二十三の主要な職業は、一表に示してあります。

程の合理化に伴う産業能率の発達と生産性の増進とは、相当大膽の職業神話(職業工を不業工に改めること)を必要とし、婦人の雇用範囲の拡大を求めました。曾ては熱線業であつたものが、線通りの比較的短い養成期間の後にはやれる半熟練又は未熟練工程に分けられました。多くは単純なものであるそれらの反復作業では、男子より女子の方が成績がよいということもいう産主もあります。

生産費、生産、販賣統制とも必然に結びつき、市場活動、管理能率とも、また生産過程に附随する他の多くの業務とも結びついていて大規模の企業は、可成の仕事に、つまり事務労働を大量に必要とし、そのために婦人労働が大量に使はれてゐるのです。

私たちの社会的習慣及び生活様式の変化は特殊の産業を発達せよとせよと、その中にはほんの味今できたばかりのものもあります。どういう多くの新しい産業、とりわけ商業やサービス部門では、おもに婦人を雇います。その中には洗濯業、美容院、飲食店及びデパートなどがあります。特に過去十五年間に著しい官庁のサービス業の発達には、官庁の仕事と婦人労働の重要な一分野としました。

上にあげたような交互作用をするいろいろの力が、今日、婦人の働いてゐる職業活動の範囲に直接に影響します。一九四〇年の国勢調査は当時の職業分類による四五一職種のうち、わずかに九種を除くのは、すべての職業に婦人の雇はれてゐることを報告しています。こういうものさしをみてみることは、婦人がいかに多種多様の仕事に従つてゐるかを示す指標とはなるもの。それよりも職業婦人の四分三が、僅か二十三の職業に集中し、その各々の職種に十万人又はそれ以上の婦人が雇はれており、全従業者の半数以上が婦人に占められてゐる職業も少くないことの方が、遙かに意味深いものであります。

一九四〇年の婦人労働者の産業分布を検討すると、石と同じく比較的少数の部門に著しく集中している姿が目に入ります。殆んど半数（四七・八％）がガーゼ・ビス、おもに製革、靴、ホテル、洗濯業、美容院、病院、学校、図書館のような専向的のガーゼ・ビスの分野で働いていました。他の二〇％は製造工業に従っており、その産業は似たりよつたりで、被服及び繊維工業に在はれている婦人が多く、商業に従うものは二割弱（一八・二％）でした。

一九〇〇年の主要な産業と、一九四〇年のそれとの比較は、廿世紀の初めからこの方、婦人の職業に現れた変化の極めて貴重な指標を提供しています。一九〇〇年には主要な十種の職業のうちには、いつていた職業関係の三つの職業がなくなつたことは、農業地帯が都市に移行した変化を示しています。一九〇〇年には有刀だつた婦人服飾とヘリカガリの女子労働者が、一九四〇年までの間に被服及びブクセリ工場、工員及び類似の労働者に変わつてしまいましたが、これは工場生産への推移を示すものです。仕中、教員及び賣手は両方の時期のどちらでも主位を占め、こういう方面での女子労働者の需要が相成らず多いことを示しています。一九〇〇年には向類でなかつた四つの職業グループ——速記者、タイピスト、及び秘書——、被服、計算機、及び現金出納係、——書記及類似の労働者へ他の分類にはいりません。——看護婦が一九四〇年には主位を占めるようになったのは極めて意義深いことと想います。

オニ次大戦中に婦人労働者の職業的及び産業的分布に重要な変化が起りました。製造工業の重要性が著しく加わると同時に、商業及びガーゼ・ビス業が衰えました。ごく近い将来を推測する基礎となる最近の資料はすべて、製造業の方に多少婦人が進出しつつ、再び戦前の型に帰ろうとする傾向を示しています。

年令の特徴

一般人口の年令層に影響を及ぼす状況の变化は、婦人労働者の年令分布にも影響を与えました。同時に他の要因も働いています。たとえば家族員数のへつたことと、その結果として婦人が子供を生んだ後に働く年数がふえたこと、初めて就職する年令が一九〇〇年に普通であつたのよりも、一九四〇年の方が高くなつたことなどです。

他のどの年令グループよりも二十才から廿四才までの婦人が一番多く働くのは普通のことです。けれどもこれより若い労働婦人の割合がへつたと同様、婦人の労働全体に対するこの年令グループの相対的な重要性もへつてきたのです。一九〇〇年の労働力のうち、十四才から十九才までの女子は二四％を占めていましたが、四十年後にはその年頃の数は、全労働女性の一一％以下になりました。これに加えてなお若い印象を与えるのは、一九〇〇年には十六才から十三才の少女が廿五千人もあつたのが、一九四〇年には統計表から姿を消したほど、児童労働がなくなつたことです。同じ期間に二十五才——四十四才の婦人労働者の数は、正確に四百五十以上の増加を示し、四十五才及びそれ以上の者は一九〇〇年よりも二百万人もふえていました。最も著しい相対的変化は、三十五才及びそれ以上の婦人の中に取りました。戦時中の労働市場には若い婦人も多くはいつていたものの、戦時中増加した人々の最大の割合をしめたものは、三十五才及びそれ以上の年頃の婦人でした。昨年中へつた婦人労働者はおもに若い若で、その結果年長の婦人労働者がますます重きを加えました。一九四六年十一月の全婦人労働者の平均年令は三十四才と化した。

現在の労働力の年令グループの構成についてのくわしい資料はまだ手に入りませんが、王階の傾向を基礎とする推定によれば一九五〇年には、一九四〇年にくり返して三十五才——四十四才のグループ

が百廿三万六千、四十五才及びそれ以上の婦人が百万人ふえる勘定です。婦人労働者の年令グループの構成の成達はオニ表に示してあります。

オニ表 14才以上の年令階級別女子就業者数 (1940年・1900年)

年令	実数 (単位千人)				増収率		
	1940年	1900年	1900年~1940年増加数		1940年	1900年	1900年~1940年増収率
			実数	率			
総数	12,945	5,114	7,781	151.2	100.0	100.0	
14~19	1,377	1,231	146	11.9	10.7	24.1	55.6
20~24	2,659	1,194	1,465	122.7	20.7	23.4	11.5
25~34	3,561	1,173	2,388	203.6	27.7	22.9	21.0
35~44	2,466	677	1,789	264.3	19.2	13.2	45.5
45以上	2,782	839	1,943	231.6	21.7	16.4	32.3

2) 1900年度国勢調査においても10才~13才の女子205,000人が就業者として報告されている。この年令層の女子は1940年度に於ても特に就業に従事していることが知られているが、数が僅少なため1940年度国勢調査の表には現れていない。

(C.P.T.O.)

結婚状況

今日の労働婦人の結婚状況は、既婚婦人の増加、離婚率の増加、及び女子人口の中の未婚者増加の傾向をもたらし、社会的変化と密接な関係をもつています。既婚婦人の就業に対する態度の变化したことも、国勢調査の度ごとに現れている既婚就業者の割合を増加させた原因であることは確かです。夫婦間、そして新婚の夫婦の間では夫婦で費用を分担すること。とりわけ特別の支出があつた場合には、費用を合理的に見解の負担をまぬかれて、時には費用を分担するのを当然と思つて、これは珍しくありません。そこで一応四〇年には女子労働力の三分二以上が既婚者であつたのも驚くには足りません。その数は今日までふえる一方で、他の既婚者のグループよりも遙かに早い速度でふえ

いるのです。一〇。年に既婚の女子有業者は八十万にたりなかつたのが、一九四〇年には之の数は四百五十万にはねあがり、他のすべての婦人の相対的増加の五倍以上の増加を示しています。戦時中婦人労働力の膨張に最も多く寄与したのは既婚者であり、米国家上始めて既婚婦人が独身婦人の数を凌いだのでした。平和がきた時、多くの既婚婦人が職場を去つたことはよく知られています。現在の労働力の結婚状況についての資料はまだまとまつていませんが、今まで見られた既婚婦人増加の傾向が、将来くつがえされると思われません。

全体の形勢を正しく伝えるためには、全体としての既婚労働婦人は相対的に少数であることを言つておかねばなりません。即ち、一九四〇年には独身婦人の四六五に對し、既婚者一五〇、未亡人及び離婚者三〇〇を意味した。けれどもオニ表の示す通り、既婚者の増加は、人口中の既婚者の増加率は人口の増減につれて上下してはいますが、労働婦人の中の既婚者の増加は、人口中の既婚者の増加率をはるかに凌ぎ、廿世紀の重要な特徴を示しているのです。

既婚婦人の場合、就業するかしらないかが、社会施設の貧乏と、その施設が一家の予算の中で利用しうる程度に安いかどうかといふことで定められることが、他の婦人のグループの場合よりも多いのです。たとへばイギリスでは戦時中、婦人が仕事を終つた時、自宅へもち歸れるようにあつた食物を賣つたり、婦人の付く軍需品工場で、洗濯屋の下ラックが家庭の洗濯物をまといめていったようなサーヴィスの差違がそれに当ります。インド及南アフリカ諸國のように託児所の施設のある所もあり、こゝういふ社会施設があるために、それがなければ家庭に留まる婦人が、家庭外の仕事に従事してその腕を振うこととなるのです。幼児学校や社中紹介所(アメリカでは最近これがチラチラでさかけてきた)もまた婦人が就職する上に直接の関係をもつています。就業しやすいようにするサーヴィスは十分備わつていても、こゝういふサーヴィスに要する費用に對

第三表 14才以上の女子労働力人口及びその結婚状態
(1900年～1940年)

		(単位: 1,000人)			
		1940年	1920年	1900年	1900年～1940年 の増減率
14才以上の女子	人口	50,549	36,190	25,024	+102.0
	労働力人口 ^{a)}	12,845	8,430	5,114	+151.2
	人口に対する労働力 人口の割合	25.4	23.3	20.4	+24.5
	女子労働力人口の割合	100.0	100.0	100.0	—
有夫者	人口	30,090	21,319	13,810	+117.9
	労働力人口	4,561	1,920	769	+493.1
	人口に対する労働力 人口の割合	15.2	9.0	5.6	+171.4
	女子労働力人口総数に 対する有夫者労働力人口の割合	35.5	22.8	15.0	+136.7
未婚者 未成人 離婚者	人口	20,459	14,871	11,214	+82.4
	労働力人口	8,284	6,510	4,345	+90.7
	人口に対する労働力 人口の割合	40.5	43.8	38.7	+4.7
	女子労働力人口総数に 対する未婚者労働力人口の割合	64.5	77.2	85.0	-24.1

a) 1900年～1920年間は職業者に限る。

合衆国商務局調査所編、1940年度アメリカ合衆国労働力人口調査報告書、労働力、第1部、合衆国労働力人口、第4巻、第1部、合衆国労働力人口、第5巻、第1部、1900年度アメリカ合衆国労働力人口調査報告書、第2巻。

して賃金水準がどの位かというところが、婦人の就業を決定する上に支配的な力をもつてゐる。これは、その他の理由のために、あるひとり婦人を労働力の中にあると見てよいかどうかを決定するに、それがつかない場合もあり得る。アメリカの諸州では婦人労働者の失業率をさめる時、これを問題とし、したが、矛盾した結果を見たこともありました。男子の場合にはどんな仕事でも

仕事をしなくてはならぬという、経済的圧迫、夫や息子の収入で生活する婦人には、それと同等の影響を与えず、その婦人が就職する場合、支出がふえるのに対して賃金が引合つかどうか、他の家族に不便を与えないかどうかをも計算して考えるのです。

家族関係

一般に、世帯は母の家族といえは、当然父母と子供から成り立つてゐるものと考えられますが、それと着しい対照をなしている世帯の家庭が、一九四〇年にはアメリカ中に五百五十万戸もありました。世帯主が男にせよ女にせよ、みな働いてゐるものは限りません。一九四〇年に世帯主の働いてゐる約二千九百五十万のうち、二百五十万が女である。これらの人々は、単に自分の生活を支えるばかりではなく、家族を養つてゐました。いいかえればアメリカ労働婦人の天分の一は世帯主だったのです。

世帯の家はますますふえてきました。一九三〇年にはそれは合衆国の全戸数の一三・七%だったのが、一九四〇年には一五・三%となりました。その日(日)ロッドパ戦勝の日、一九四五年五月にはその割合は二一九%となりました。戦前の資料によれば、世帯の割合は、全国平均よりも貧乏人や工業地帯に住む人々の間に少し多かったのです。

クリーブランド、オハイオ、エタ、で一九三九年、即ち平時におこなわれた調査によれば、可正帯の家族がフル・フの中に生活してゐる者は婦人労働者の三割にすぎませんでした。婦人労働者を對してゐるのは、片ちゃんばの家族や複合的な家庭、つまり片親や両親のない家族、又はほかの親戚、即ち姑、伯母、祖母など、その家族の中に加わつており、それらにその婦人労働者の収入を養われてゐる場合の多いことが分りました。

世帯主とひとめられてゐない婦人の中にも、自分の生活費を稼ぐばかりではなく、同居の別居かを

わす、扶養家族をもつ者は少くありません。婦人労働者の扶養義務について

第四表 夫の収入別に見た有夫者の就業率

1940年度の100,000人以上の自給におけるもの

夫の収入 額	有夫者の就業率
無収入及び不明	16.7
81 ~ 199	24.3
200 ~ 399	27.6
400 ~ 599	24.2
600 ~ 999	22.7
1,000 ~ 1,499	21.7
1,500 ~ 1,999	18.8
2,000 ~ 2,999	14.0
3,000 以上	9.2
	5.6

日本国労働調査局編、1940年度、第16回労働調査、人口、労働力（サンプル統計）、世帯の雇用及び家族、オスラ家、132頁

（一）
うてゐる全体的買収が驚くべきものであることを示しました。家族と同居している者と同様、ひとりぐらしの婦人の場合にもそういう責任のある者の多いことが分りました。家族全体の収入の多少が、労働婦人の数に直接影響を及ぼすことは今までに再三証明されました。一九四〇年の国勢調査はこの程の動かし難い資料を提供しています。
これによれば夫が低所得のケルに属する場合ほど妻の収入割合が高くなっています。第四表は夫の所得が高いほど妻の就業率が低いという一貫した関係を示しています。
家族所得の水準が決定的な影響をもつことは、果たぬような低所得

得たところの中からは、婦人の割合が高くなることによつても明かされます。
一九四〇年の国勢調査は、白人世帯の中からは労働者が二四％にすぎないのに対して、黒人女子の中からは三八％に到してゐたことを示しています。白人の既婚婦人のうち労働する者は一四％にすぎないのに対し、黒人の既婚者の三三％が働いていました。

無給の労働者

そう古い昔でもない時代に、こういう問題が論ぜられる時には無給の労働者——職業につくのは悪心しない、みつともないことだと思われていた未婚の叔母や独身の姉妹で、家事の手つたいをして食料持を稼いでいた人々のことが問題になつたにちがいないのです。曾ては自活しなければならぬ女性に対してはそれをせしむ、多少憐れみを以て望む態度だつたのが、今ではほかに生活の道のない婦人は、否否をどわす、また年にもよらず、無給の労働者によつて自活の道を求めるのが当然と思われ、激

励されるように度つてきました。こういう態度の変化は、社会の進歩をはかるものさしです。
けれどもこういうたゞで、無給の家族労働者がひとりもいなくなつたというわけではありません。それどころか一九四〇年の国勢調査は、そういう境遇にある婦人が四十万人もいることを報告しています。それが、それどころか、十九世紀のそういう婦人たちと同じタイプではありません。即ち家事奉公人はほんの少数で、半数以上は農場労働者であり、その過半数は有色人種でした。五分の一は貴子、その他

の多くは縁組係り、現金出納係り、並記者、タイピスト、又は給仕人のような仕事に従つていました。
それは父や夫の店、工場の事務所又は飲食店などで働いています。
最終の家族労働者はすべて稼取されてゐるものと定めることはできません。根本的には有給労働者が、その現金取得の全部又は大部分を家族の金庫に入れてしまふのと、家族の企業から個人的な現金

一九四四——四五年度に婦人層の行つた調査は、家族と同居している婦人の九二多は、家族の生活費に対して規則的に寄与し、その半数以上は、その稼ぎ高の五割から十割までを一家の共同の財布の中につぎこんでいたのです。

一四四——四五年度のニューヨーク州における調査は、これよりもっと大きく寄与していることを示しています。家族と同居している婦人たちは事実上例外なく必ず家庭に金を入れていました。約四分三の婦人たちはその家にもち帰る金の半分又はそれ以上を家庭に入れていました。

家族の金庫へ納める金のうち、どの位の割合が婦人の稼ぎ高の中から出ているかを知らうとした調査もほかに少なく行われました。

クリューランの婦人労働者についての一九三九年の調査によれば、家族の中の稼ぎ手全体からうける総金額のうち、五割以上が婦人から出ている家庭が半数以上に達してしましました。それと同様のユタ州の調査では六割の家庭が、その稼ぎ手から、総収入の五割又はそれ以上をうけていました。

労働統計局及び家庭経済局が行った一九三五——三六年度の家庭収入の研究は、四十五都市からの十三万一千家族の例のうち、約二万六千の労働婦人につき五人に一人は家の主要な稼ぎ手、即ち家族の収入の中に最大の金額をもつてくる人物でありました。

婦人の財政的負担は、他の一般的に状態と直接に関係しています。その中の基本的なものは、男子の雇用状態と賃金水準とであります。家族の中の男子が失業したり、十分な賃金がとれなかつたりするためには労働市場への入りだすことは、好況時代には進んでひきうけようとしないうる責任をひきうけるものです。男子が心ならずも労働力から退くことも同様の結果をきたします。戦争の時期は、こういう労働力の間に著しい作用をするものさす。けれども男子から女子へ責任の移るほかの原因は、精神病の繁くべき増加と、それに伴う入院患者の激増、及び離婚、別居、死亡又は無能のために男子

の存在が経済的義務をいかにせねばならなくなった家庭などに現れます。

自己発表

自活の必要と入りまじり、また時にはそれだけで、説教の動機となるものに自己発表の要求、自分の個性に適した分野で社会に寄与したいという要求があります。わが国の無料義務教育、男女共学の珍しく早い教育制度のもとに与えられる学術的訓練は、ごく細かい部分的なもののほか、男女共に差別を設けません。

高等教育を受ける学校の課程はどこから見ても男世にとつて同様で、和々の学生の選択によつて課目が変わるだけです。

そこで男にも女にも同じ向上心——自分の心理的要求に充じた仕事の世界を愛びたいという欲望——がうえつけられるのは驚くに足りないことです。加うるに精神美の教師が人の幸福を破壊する力をもつと強調する。抑折口とか抑制とかいうものに對あうと思ふことが多くなるにつれて家庭より仕事所、店、工場、学校、又は病院で働くことの満足を見出す婦人があることも、互にはなかりないのです。ほかの仕事よりも家庭をいしむお勤めの方をよろこぶ婦人も多いことは確かです。一方、心ずしむ特別の才能があるとか、高い俸給を得ているとかいうのでなくとも、家庭外の仕事にその能力の一番満足な出口を見出さるものがあります。

共同社会の感情

有給の暇に、よく動機に影響を与えるものに世論があります。大抵の人々の動作の型の基礎となるものは、社会の期待に添いたいという欲望、あるカル・カ方仲間でありたい、自分の行動をその期待

に順応させたいという氣持であります。一般に行われている世論を断片として排斥し、そのブルジョアの非難嘲笑を敢て恐れずに自己の道を主張する例外な入々もありました。何十年にもなりぬ割合に、近い過去の時代に、生産の事業を志した婦人は、進んで世評を無視する決意をした人々の仲間でした。その中には野蠻や妨害にもかゝり、めざましい成功を上げた人々がありました。もはや婦人が身を立てるために英雄主義の行動は必要なくなり、またそれを實現するためにいざなく他身の幸福を憂ふにも及ばなくなりました。それどころか、ますます多くの人々が、婦人はほかに生活の方法がなければ勿論、また生活は問題になりぬ場合さえ、本人が望むなら何くのか当然だという意見をもちようになりました。私たちは婦人にとつては初く、と必世間に従う行爲となる時代に近ずいてきたといえますよう。